「景観開花。」～土木設計競技の試み～

東北大学 正会員 ○平野 勝也

1. はじめに

21世紀に入ってからだろうか、土木におけるデザイン教育が拡がりを見せはじめ、複数の大学でデザインを取り込んだ設計演習等が実施されるようになってきた。そうしたデザインの薫陶を受けた学生達は、いずれ日本の土木デザインを背負っていく。日本の土木デザイン水準を高めていくためには、授業としての演習で終わることなく、さらなる挑戦の場所が必要なのではないかと以前より考えていた。実際、そうした教育を受けた学生が腕試しをするような設計競技は、土木の世界ではほとんど皆無であったからだ。

建築界のデザイン水準を支えているのは、膨大な設計演習の授業時間だけではない。授業の外に数々の設計競技に学生が取り組んでいるところも大きいだろう。土木においても、熱心な一部の学生は、建築の設計競技に応募し、他流試合をすることで腕試しをしていた。しかし、それはやはり他流試合でしかない。こうした考えから、2004年から「景観開花。」と銘打って、土木的な課題を課す設計競技を毎年、仙台で開催してきた。

「景観開花。」は今年で10回目を迎える。本稿では、こうした10年弱の設計競技の取り組みやねらい、応募状況等を報告する。

2. 「景観開花。」の特徴とねらい

「景観開花。」には、他の設計競技ではあまり見られないいくつかの特徴がある。最も大きな特徴は、もちろん土木的な課題を出していることである。次の特徴は、模型を提出させることであろう。これは、景観という柔軟かつ自由度の高いデザインを評価する上でも、パネルでは不十分であろうという判断に基づいている。

各回の課題は表-1の通りである。初期においては建築系からも応募者が出るように課題設定に腐心してきた。もちろん設計競技の主眼は土木デザインにあるが、建築系からの応募がなければ設計競技として成立するだけの作品が集まらない危惧があったからだ。もちろん、そうした後ろ向きの理由だけではなく、学生時代から建築の学生も土木デザインに興味をもってもらい、建築からの参画についても土木デザインが高まっていけばいいという判断も当然あった。なぜなら、建築系のデザイナーが実際の社会基盤施設のデザインに関わった事例において、素晴らしい作品もあるが、いくつかは眉をひそめるものがあるのも事実であるからだ。そうしたこともあり、審査委員長は毎回、土木の篠原修東京大学名誉教授にお願いしてきたが、審査委員には、必ず建築系の方にもお願いをしてきた。特に、五十嵐太郎東北大学大学院都市・建築学専攻教授は、篠原審査委員長同様、初回から全て審査委員を務めて頂いている。なお、2009年にダムを課題として以降は、純土木的な課題設定を続けて来ている。これは、それなりに「景観開花。」が浸透してきたと思われたため、無理に建築から応募しやすい課題設定にするのではなく、本旨にそって、土木的な課題を設定すべきであると考えたこと、さらに、2011年の東日本大震災により、復興まちづくりの基本的な部分を連続テーマに据えることにしたことふたつの理由からである。

また、「景観開花。」は二段階審査を行っている。一次審査で模型とパネルにより入選作品を決定し、入選作品応募者には、一名分の国内旅費を補助し仙台で実施する公開審査会(二次審査)でプレゼンテーションを行って貰い、その質疑応答を踏まえて、最優秀、優秀、佳作の各賞を選定している。こうした選定方式は、初回より変わっていない。

3. 応募状況とその変化

各回の設計競技への応募状況は表-1の通りである。「景観開花。」では、概数把握のため実際の応募(模型等の送付)前に、エントリを課している。通常的设计競技の数値は知らないが、エントリ者の半数程度が毎回

表-1 「景観開花。」各回のエントリ者および応募者

年度	課題	エントリ者所属						応募者所属							
		エ ン ト リ 数	土 木	建 築	社 会 人	そ の 他	不 明	内 コ ラ ボ ※	応 募 数	土 木	建 築	社 会 人	そ の 他	不 明	内 コ ラ ボ ※
2004	新時代の橋梁デザイン ※※	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
2005	新時代の土木構造物デザイン	85	30	30	10	3	12	(9)	30	12	11	4	1	2	(6)
2006	川とまちの新しいつながり	97	28	48	6	5	10	(4)	41	15	15	3	4	4	(1)
2007	道の駅	96	16	22	9	2	47	(0)	41	11	10	3	1	16	(0)
2008	駅と駅との新しいつながり	112	17	10	21	1	63	(6)	46	13	2	5	1	25	(6)
2009	新時代のダム環境デザイン	71	17	15	16	4	19	(7)	25	7	7	3	3	5	(7)
2010	新時代の高架橋デザイン	94	10	20	18	3	43	(7)	38	6	9	8	2	13	(7)
2011	未来へつなぐ街路デザイン	113	17	34	20	2	40	(8)	51	12	15	6	2	16	(8)
2012	未来へつなぐ防潮堤デザイン	44	16	10	4	0	14	(8)	23	12	6	1	0	4	(8)

※：「内コラボ」はエントリ者，応募者中でそれぞれ土木と建築コラボレーションのチーム数（内数）

※※：2004 はデータ紛失。

実際に応募している。この比率はかなり高いのではないかと想像される。課題によって、土木と建築のバランスは変わってきているが、特に、土木のエントリ者に対する応募者の比率は極めて高い。これは、やはり土木でのデザイン教育が拡がり、設計競技に挑むことが、例えば研究室での伝統になりつつあるのではないかと想像される。実際に常連となっている研究室も多い。もちろんこうしたことは、各大学で土木デザインを教えている教員の協力も当然奏功しているものと思われる。

4. おわりに

実際に土木系の応募者からの作品は、模型の出来はもちろんのこと、提案内容そのものも、年々その水準が上がって来ている。これは、やはり各大学でのデザイン教育の賜であろう。そして、この「景観開花。」だけではなく、時をほぼ同じくして始まった、GS デザイン会議の GS ワークショップ、そこからできあがった GS ユース、景観・デザイン研究発表会における若手の会、演習作品展など、着実に志を同じくする全国の仲間が相互刺激、切磋琢磨しうる環境が内発的に創られてきた。こうしたネットワークは、土木・建築の垣根を越えて拡がっている。志を同じくする仲間でありライバルの輪が拡がることは、その分野の力を高める必要条件であろう。

現実の土木デザインも、徐々にではあるが、フィールドが拡がっている。そうした中で、実現性を問わないアイデア勝負の設計競技で、デザインを競うことは、教育の機会としてはますます重要になってくるものと考えている。今の若い世代が土木デザインの主力を担う時期には、こうしたネットワークや経験が、大きく「開花」することを期待している。

謝辞

「景観開花。」の運営は、毎回、東北大学の学生諸氏が担ってくれてきた。記して歴代の事務局の諸君に感謝を表したい。また、各大学で熱心にデザインを指導し、学生の応募を促し続けて下さっている先生方にも、感謝を表明したい。

キーワード 土木設計競技，デザイン教育，景観開花

連絡先 〒980-8579 宮城県仙台市青葉区荒巻字青葉 6-3-09 東北大学災害科学国際研究所 TEL022-795-7493